

戦後批評とジェンダー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2013-05-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中山, 和子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/13989

戦後批評とジエンダー

中山和子

杉本良吉・岡田嘉子の旧ソ連亡命事件を扱った平野謙「ひとつの反措定」(『新生活』一九四六・四)が、戦後初頭の「政治と文学」論争に刺激的な呼び水となったことは周知である。

「どんなセリフで杉本が岡田をくどきおとしたかと思ひいたれば、おそらく男性的駆けひきと左翼的言辞とにあざなはれたその口説の中味が、いかに健全な人性を無視した奇怪至極なものだったかは明らかだらう。」とは、そのとき問題とされた、平野謙の特異な臆断である。

一九三八年一月、当代の人気女優をとまなつて雪の権太国境を越え、派手に世間をさわがせた演出家・日本共産党員杉本が、その一年あまりのち(一九三九・一〇・二〇)、銃殺されていたとは、当時の平野謙の知るよしもなかった。杉本は中国の鹿地巨らと同じく、敗戦直後

の日本へまもなく帰ると信じられていたのである。

「ひとつの反措定」は同じ時期『近代文学』同人により開かれた座談会「文学者の責務」(『人間』一九四六・四)のなかの発言を敷衍したものである。席上、誰が一番戦争責任から免れえているのか、という問題から杉本、鹿地の名が出されたという。

戦争下の悪気流に生身をさらし、何事をかいわねばならなかった人間のひとりとして、平野謙は国外亡命者や獄中組の沈黙に、戦争非協力という意味づけをすることに反対した。「罪なきものは無かった」というのが、当時の平野謙の戦争責任の考えかたであった。杉本は国内でできる限りたたかった果の亡命か、逃避的亡命ではないのか、という強い疑惑が先の大胆な臆断を生んだひとつの理由であって、これを「下司のかんぐり」と嘲罵し、激しい論駁を開始した中野重治をはじめ、当時の論

争当時者は、杉本がすでにこの世に亡いとは誰も知らなかったのである。

亡命事件以来三十四年ぶりで帰国した岡田嘉子は、その談話や手記⁽¹⁾で、杉本病死(肺炎)のことを伝えなければ、近年になって、杉本はスパイ罪で銃殺刑に処せられていたことが判明した。一九九一年の旧ソ連邦解体以降、ロシア指導部は旧ソ連時代の秘密文書を一般に公開しているし、現地の自由な取材活動や報告が可能となっているため、今日では岡田嘉子が死ぬまで(一九九二・二)秘めていた事実が、生存者の証言をもとに明らかになっている。スターリン大粛清下の旧ソ連へ越境したその直後の拷問やスパイ自白、恐るべきラーゲリ体験その他、衝撃的事実が明るみに出されている。

しかし、じつはここで問題としたいのは、戦後五〇年ののち、はじめて明らかになったこうした歴史の現実そのものではない。先に引用したとおり、戦後文学論争の初発に、平野謙が「女」をくどきおとした「男」の「口説」を問題にしたそのことの今日にかかわる意味である。

「男性的駆け引きと左翼的言辭とにあざなはれたその口説の中味」という、あたかも目撃したかのような断言をあえてするには、それだけの理由がなくてはならない

のだが、「疑ふものは小林多喜二の遺作『党生活者』に描かれた『笠原』といふ女性の取扱ひかたをみよ」(『政治と文学』)『新潮』一九四六・一〇)と弁明したように、それは『党生活者』の読みのなから直観的に類推されたものであった。

しかし、このときすでに発表すみの長篇評論「島崎藤村——『新生』覚え書」(『近代文学』一九四六・一一)をみれば、そこに『新生』の主人公岸本捨吉と姪の節子との関係が重ねられていたのは明白であって、亀井秀雄が「平野謙は、言葉の権力関係に敏感な、そして、とりわけ自伝的な作品におけるその問題を鋭くえぐって、戦後の活動を開始した」と鮮やかに指摘したのは、こうした事情をふまえてのことである。さらに亀井は「節子の人間性『抹殺』、という形で『新生』の表現構造の欠陥に對しては正当に發揮された」平野謙の「批評能力」が、「現実の事件(杉本と岡田の越境事件)に向けられた時」に、「根拠の薄弱な『想像』に変質」してしまった、とも述べている。

文学と現実とを同一次元に扱いがちな平野謙の批評方法の特色と弱点とが、ここに指摘されているともいえるだろう。とはいえ、亀井秀雄のいう、平野謙の「根拠の薄弱な『想像』」というものには、じつは「女」のステ

レオタイプ化をめぐる、今日のフェミニズム批評にか
かわる問題性を読みとる必要があるだろう。

「ひとつの反措定」のなかで岡田嘉子は、杉本良吉の
「目的達成」のため「利用」された、ひとりの「小柄な
可愛げな年増女優」だとされている。「あれは何年の暮
れだつたらうか。私はちやうど富山房の前あたりで岡田
嘉子とすれちがつたことがある」というふうに、私的に
回想的に物語られる岡田嘉子は、伴れらしい人のいな
い、ほとんど「可愛らしいといつてもいい」印象によっ
て、平野謙を感じさせたのであった。

一方、三十四年ぶりで帰国した岡田嘉子は、村山知義
との対談⁽⁵⁾のなかで、その頃のことをさまざまに語ってい
るが、当時の彼女は、松竹から千円という超高額の月給
をとる有名女優であった。九段坂の豪華なアパートに住
んで、運転手つきの自家用車を乗りまわしており、杉本
もときどきそれでドライブに出かけていた。結核で寝て
いる杉本の妻智恵子と、その母親と弟との一家の生活費
として、月づき十五円を仕送って援助していたというこ
とである。が、彼女の鏡台の前には、一瓶三十円のク
リームがいくらかも転がっている有様であった。地下潜伏
中の共産党員杉本の活動と、その家族の生活費とが、女
優岡田の経済力に支えられていたのは、これをみるかぎ

り明らかである。岡田はみずから「姐御みたいな」性分
だと自分を語っている。

杉本の病妻にたいするむごい裏切りや、彼のいい気な
ブルジョア的恋愛や、岡田にちらつく優越意識などがこ
こでの問題ではない。ひっそりと「可愛らしい」岡田嘉
子が、「男」の好むひとつの虚像にすぎないということ
である。

むろん、当時の平野謙がこのような情報を手にしてい
なかつたとしても致しかたないだろう。しかし、ある日
の偶然的印象から、ためらわずに「可愛げな」女優を想
定し「男」の「口説」の「奇怪至極」などを一直線にみ
ちびき出すのは、平野謙の「批評能力」の問題である以
上に、男性批評家平野謙の問題であるだろう。「女」は
「可愛げ」であればあるほど、「男」の「口説」のあざと
さは鮮明に浮き上るわけだが、こうした対比の構造自体
に時代のジェンダー規範の根深さを見出しうるのではあ
る。

杉本をはげまし援け、雪の国境を越えスターリン大粛
清下の旧ソ連で、したたかに生きのびた「強い女」岡田
が、こうして「可愛げな」女優としてステレオタイプ化
されるところに、戦後文学論争のなかの「女」たちの特
色はまず現われる。以下、ハウスキーパー、女党员、母

親、女房などとして登場する彼女たちは、戦後「民主主義」体制の言説を貫くジェンダー支配の構造を、おのずと暴露する存在として姿を現わすのである。

*

「政治と文学」論争とは、ひとくちに言えば戦前のマルクス主義文学運動の再検討と、その戦後民主主義文学運動への批判的にかかわりかたをめぐる論争であるといつてよい。その争点は次第に小林多喜二『党生活者』の評価、とりわけ主人公「私」と笠原という女性の関係にしばられていった。

平野謙は杉本・岡田の関係と、「私」と笠原の関係をアナロジーとして「マルクス主義芸術運動全体につらなる一病根」「不感症的人間侮蔑」を説いて次のように述べている。

（笠原の扱いには）目的のために手段をえらばぬ人間蔑視が「伊藤」といふ女性とのみよがしな対比のもとに、運動の名において平然と肯定されてゐる。そこには作者のひとかけらの苦悶さへ泛んでゐない。その点に関しては、虐殺された小林多喜二とい

へども、『濃東綺譚』の作者や『縮図』の作者の前に愧死すべきであらう。

主人公「私」は軍需工場に潜入した非合法共産党員のオルグであるが、警察の眼をごまかして日常性をよそおうため、笠原というタイプリストと同棲する。彼女は「私」の生活費から活動の交通費まで、一切の面倒をみたらうえ、二人分の炊事や洗濯もして勤めに出ている。今日の感覚ではとても考えられない奉仕的な女性である。「私」のことがもとで彼女は勤め先を首になるが、仕事はなかなか見つからず、「私」は最後にカフエーの女給にでもなったらどうかと勧め、彼女がとうとうヒステリックに、「女郎にでもなります！」と叫ぶ場面は周知である。「女郎にでもなります！」というその悲鳴にすぐつづく、次のような記述は注意していいだろう。

笠原は何時も私について来ようとしてゐないところから、為すことのすべてが私の犠牲であるといふ風にしか考へられなかつた。若しも犠牲といふならば、私にしる自分の殆んど全部の生涯を犠牲にしてゐる。（略）然しながら、これらの犠牲と云つても、幾百万の労働者や貧農が日々の生活で行はれて

ゐる犠牲に比らばたら、それはものゝ数でもない。

さらに「私」の犠牲はすなわち幾百万の犠牲を解放するのに「不可欠な犠牲」であつて、笠原はたんに個人である「私の犠牲」ではない。「組織の一メンバー」として組織を守り、プロレタリア解放をあくまで遂行するよう義務づけられている「貴重」な「私の犠牲」なのだ、と説かれている。

革命と党の神話の生きていた一九三〇年代の青年の夢が、「私」の規範を絶対視させ、今日からみれば悲惨とも滑稽ともみえるほどに空虚な「政治」の言葉が連ねられている。たしかにここには、平野謙のちにいう「組織」の「絶対化」による「私」の「絶対化」がおきているといつていいだろう。先に引用した記述は「私」のモノローグがそのまま笠原への説得であるかのように「私」に意識され、語り手もその「私」と距離がないという奇妙な構造であつて、「私」の「絶対化」とは、言いかえれば、こうした他者の「他者性」のはじめからの欠落をいうのである。モノローグが他者との対話と同一視されるような事態のなかで、「私」と笠原とのコミュニケーションはありえない。「女郎にでもなります！」という悲鳴は「私」の面前で発せられているにもかかわ

らず「私」の気持が少しも動揺しないゆえんであるう。

しかし、じつは笠原は「政治」の言葉に服従するだけの「可愛らしい」女ではなかった。「私」に反撃はできないけれども「あなたは偉い人だから、私のやうな馬鹿が犠牲になるのは当然前だ！」と発言しているのである。彼女の精一杯のイヤミであり抵抗であるだろう。近代の知の特権性——知の権力を行使する男性の特権が、「政治」の言葉において無意識的に肯定されていることへの鋭い抗議である。しかし、身近な民衆の生まな言葉は、無機質な抽象的な言葉を語る「私」の胸にはついに響いてこない。そして、以後彼女は「私」の説得の言葉を「黙つてきいて」いる。「それから一言も云はずに、彼女は早く寝てしま」うのである。

「女」の言葉は封じられ、沈黙が強制され、ついに寝かされ意識をはぎとられる。笠原をたんに「政治」の「人間蔑視」の、哀れな犠牲とのみ見る「男」の視点からは、彼女の抵抗も、強いられた沈黙も、はなからの他者性の欠落という関係も充分見えてこないだろう。

「私」は笠原に関して読者にはほとんど情報をあたえないが、彼女が断髪、洋装のタイプストだといふことはわかっている。タイプストは当時まったく新しい女の職業であつて、タイプスト学校を卒業し、収入も非常によ

かった。笠原の表象はあいまいであるが、じつは当時の
大学出身者の月給よりも高給のとれる、ハイカラな職業
女性として自立していた女性である。しかも昭和初年の
時代風潮のなかで左翼のシンパになるほどのモダンガ
ールであって、マルクスボーイと対で呼ばれたエンゲルス
ガールの一人といつてよいのかも知れない。

「私」が突然に一夜のねぐちを頼んだときも、「君、男
だから弱る」などと男言葉を使って笑ったり、一晩中、
下宿のおばさんに気をつかった翌朝、一歩外に出たとた
ん「あーあ、畜生め！」とか「クソばゞあ！」などと明る
く言つてのける、生きのいい言葉をもつた女性である。

ところが「私」が「一緒になること」を申し出たとき
以来、彼女は不意に言葉を失うことになる。「それを聞
くと彼女は又突然あの大きな（大きくした）眼で私の顔
を見はつた。彼女は然し何も云はなかつた。私はしばら
くして返事をうながした。が黙つてゐる。彼女はその日
とう／＼何も云はないで、帰つて」しまったことになつ
ている。

まもなく彼女は「私」の申し出を承諾することになる
のだが、非合法共產黨員との同棲を決意することで、ひ
とりの「女」がこの先負わねばならない危険や犠牲を
いったいどのように考え、どうやって克服したのかとい

う、その過程、そのことにたいする「私」の配慮などの
記述は皆無であつて、「私」が会つたとき、彼女は今迄
になく「チヨコナンと坐つて」おり「私」はそれを「不
思議に眺めた」のみである。

こうした鈍感なデクノボリの「私」と、不自然に言葉
をもぎとられた笠原とのコミュニケーション不全の異様
な空白が、ハウスキーパー制度というものの奇怪さをお
のずと証しているだろう。

「私」の不思議なくらいの鈍感さは、亀井秀雄も指摘
しているように、笠原と一緒になつて性的関係が出来て
いるはずでありながら「私」の意識に何の変化も生じな
い、というところにも現われている。「私」には笠原の
身心を収奪しているのではないかという内省はまったく
みられない。

喫茶店に勤めることになつた笠原が、一日中立ち通し
の仕事で立ち腫れのした足を「私」にみせ「私」がめず
らしくそれを撫でてやる場面があるが、「私」は若い女
に寄生し献身を強いていることへの自責で胸が痛むより
も、まず紡績工場の全女性たちの立ち腫れのした足のつ
らさを説いて聞かせる、という「私」である。しかし、
男のあぐらの中で笠原はひとこと「本当に！」と相槌を
打っているのだ。まさに「男性的駆けひきと左翼的言辞

とにあざなはれた」口説といってよいのかもしれない。たんに「可愛らしい」女でない「女」笠原は、不自然に沈黙を強いられ相互交通の失われた言語空間で「私」の傀儡と化されているといつてよいだろう。

平野謙のちに「私」と笠原との関係を「非日常性と日常性とのどうしようもないズレ」とも表現した。しかし、地下活動者である「私」の、非日常性による感性のマヒや自閉は、相手の「女」の他者性を剝奪せずにはなりたないのであって、『党生活者』の言葉は、非日常性と日常の「ズレ」を暴くものとしては機能していないように思われる。むしろ、酷薄な生活条件のなかで絶対的規範にしばられ、異様に抽象性をおびた人間たちの男女それぞれの奇型化と、革命運動内部にも浸透した時代のジェンダー構造を浮かびあがらせている点において、『党生活者』は歴史の意味があるといえるであろう。

*

『党生活者』論争において「私」と笠原との関係は、「目的」のために手段をえらばぬ人間の蔑視、「政治」の「利用」主義として追及されたが、その笠原は、伊藤という女性活動家と「みよがしな対比」において描かれて

いるとも評されていた。

伊藤は「私」と同じ組織の言葉（共通のコード）で話す間柄であるから、一見、笠原の場合のようなコミュニケーション不全がない。彼女は「人眼をひくやうな綺麗な顔」をしており、黙ついても男たちがデパートへ連れ出して、物を買ってくれる。彼女はまたそれを「極めて落着いて、よく利用した」。「見込のありさうな平職工だと誘はれるままに出かけて行つたし、自分からも誘ふやうにして」いたという党組織の一員である。

安くもない贈物をもらう関係を、伊藤はいつたいどんなふう「利用」するのか。化粧した彼女が誘われるままに、あるいはときに積極的に誘い、どのような気持や態度で何をしているか、読者にはいっさい知らされない。「伊藤という女性の態度は少し奇怪に過ぎる」といったのは小田切秀雄だが、明らかなのは、一種性的関係を「利用」したこのオルグ活動が、組織公認だということである。それこそ「女性的駆け引きと左翼的言辞とにあざなはれたその口説」といつてみたくもなる、男女立場をかえた言葉の権力関係であるだろう。組織の言葉を使う人間として、伊藤もまた相手の人間性を無視した「口説」を、意識無意識に操っていることになる。自身に抵抗なしに伊藤はこのような行為をしえたのだ

ろうか、それとも組織の必要はすべてに優先すると思えていたのだろうか、読者は何も知らされない。

「私」はただ伊藤をそのまま肯定する態度をみせる。

「私」には「利用」主義という共通のコードがあるからに相違ない。しかし、組織の会合の場所へ「私」が入って行ったとき、伊藤は「後れ毛を掻き上げるやうにして、下からチラ」と「私」を見る。いつもは素顔だが、そのとき男工をオルグしての帰りで、化粧したその顔で「何故か私の顔を」見た、とされている。

娼婦まがいの誘惑的オルグを公認、奨励されていたかにも見える伊藤が、この微妙な態度を同志須山には示さない。伊藤が「私」に好意以上のものを感じているらしいのは、「私」がヌカ漬のなすばかりの食事なのを知って「チリ紙に包んだ五円」を渡したり「私」のシャツの汚れを心配し、店に寄って新しいのを買ったりする心づかいにも示されている。

「私」が「責任を持つて、良い奴を世話してやる」と冗談まじりにいったとき、伊藤は「苦い顔を私に向けてた……」とある。点線部は彼女の言語化しえない内部であり、そして「私」が言語化しないことで優越を示す「私」の内部でもある。

誘惑的なオルグ活動に対して、相手の男工にうしろめ

たさを感じないらしい伊藤がそのことで「私」に対しては負目を感じているとすれば、そのような差別化を伊藤に強い、むしろそこに男性的優越を「私」は感じていることになる。

伊藤が示す微妙な表情や動作には、組織の言葉で語る「私」との共通規範、共通のコードを疑わせ、危うくするようなものगतしかに存在するのだが、「私」は伊藤の送るサインの重要性を読めないだけでなくそれを隠蔽する役割をはたしている。

伊藤にはたとえばこんな発言もある。「男の同志たちは、結婚すると、三千年来の潜在意識から、マルキストにも拘らず」女たちを「奴隷」化する。須山を通じてこれを聞いた「私」はただ単に「良き同志が目付からなんだな」というふうにしかな受けとめていない。

そういう「私」が笠原と性的関係にあることを、伊藤は受け入れ／受け入れさせられているし、「私」の表情を気づかないながら、「女つぼく」歩かされてもいるのである。

平等をかかげた前衛の組織であるゆえにいっそうジェンダー支配の構図は鮮やかに浮きあがる。笠原というハウスキーパーの「使い捨て」られるのと同じ地平に、女党员伊藤も立たされていることになるだろう。女のセク

シユアリティは一方的に利用され収奪されている。二人を「みよがしな対比」だと解するのは、戦後批評に根深い「女」のステレオタイプ化のもたらした理解にすぎない。

ともに人間解放をたたかう同志たちのあいだで、男女同等がいかにモンダイであったかは、早く自由民権運動時代の岸田俊子「同胞姉妹に告ぐ」(『自由の燈』一八八四・六)の告発をみても明らかであるが、昭和の革命期をへて百年余を経過した今日もなお「性の政治学」は依然としてモンダイでありつづけている。

*

『党生活者』論争における中野重治は、岩上順一「小林多喜二」(『世界評論』一九四六・九)のような、公式的多喜二擁護論の多いなかでは、群をぬく存在だった。荒正人・平野謙らが断片的に場面をとらえて語ったのに対し、中野は小説の全面にわたって論じこれに反撃した。本多秋五は當時を回想して、荒・平野がもっぱら笠原への「私」の態度ばかりを照明したのに対し、母親をとりあげた中野は「目もさめるばかり秀抜な論理であった」と評しているが、それはたとえば次のような一節をさし

ている。

『党生活者』の主人公がその母親にたいしてとった態度はまったくユニークである。御承知のように、革命家である息子は、その年とった、やもめである、西ヨーロッパ的教養などの何ひとつない母親を、孤独、貧乏、そして息子が今日にもつかまるかも知れぬ、そして殺されるかも知れぬ、殺されぬまでも、彼女が死ぬときにも会いに来てはもらえまいという気がかり、心細さのなかへ突きおとすのである。しかも息子は、革命家では決してないこの母親に、息子が逮捕されて彼女が取り調べられるような場合、息子ひとりを利用する母親の愛で守るのでなく、資本家階級にたいする労働者階級のたたかひの正しさ、共産主義者の活動の正しさを、誇りをもって一般に守ることで守るようにと要求するのである。なんとという一方的、専制的、母親の愛情を踏み台にする的、非人間的な要求だろうといてこの息子をわが近代的自我主義者たちが非難せぬのであうか。

「私」の組織至上主義が強いた、笠原の犠牲が問題視

されねばならないとしたら、母親との関係を見捨てるのは、たしかに片手落ちかもしれない。しかし、中野らしい鋭いつめ寄りがたにも、あきらかな盲点がある。というのが今日一般の考えかたである。「私」と笠原と「私」と母親との関係はまったく異質だと考えられるからであり、本多秋五もあらためて以下のように指摘している。

「母親の場合、献身は自発的であって強制ではなかった。だからこそ読むものを感動させますのである。笠原を伊藤に見替えたように、主人公が母親を別の母親と見替えるというようなことも、事柄の性質上、そこにあるしなかった」と。

「母親の愛情はいわば先験的」であって、そこに平野謙のいう「男性的駆けひきと左翼的言辭とにあざなはれた」「口説」などというものが「入りこむ余地はない」という亀井秀雄も同意見といつてよい。ともに母親は「母親」であって、しよせん「女」ではないという論理である。

しかし、血縁の母子の愛情と、男女の性愛関係を混同したと思われそうな自身の論理に、中野重治ともあろう人が気づかないとも思えない。問題は別のところにあるだろう。

『党生活者』の母親は「のちのちまでも新しい世代に

新しい感動で読まれるであろうことをうたがわぬ」という中野の断言があるとおり、異様に奇型化された人物たちのうちでは、唯一生動している人物である。しかし、そのように美しい伝統的な「母親」像、清らかな無私と限らない受苦とにみちた「母」というものを描いた小林多喜二はむろんのこと、それに感動する中野重治、そして本多秋五や亀井秀雄もまた、男性幻想としての「母性神話」に骨がらみであることにおいて、じつは同族なのだといふべきであろう。

『党生活者』の母親は、同時期にかかれた小林秀雄「Xへの手紙」(『中央公論』一九三二・九)の母親を想起させる。それは「私」をこちよく包む故郷であり、無限に受容するもの、本質的に他者性をもたぬものとしての「母」である。

利口さうな顔をしたすべての意見が俺の気に入らない。誤解にしろ正解にしろ同じやうに俺を苛立てる。同じやうに無意味だからだ。例へば俺の母親の理解に一足だつて近よる事は出来ない。母親は俺の言動の全くの不可解にもかゝはらず、俺といふ男はあゝいふ奴だといふ眼を一瞬も失つた事はない。

マルクス主義文学の有力な担い手である小林多喜二の「母親」と、それに対峙した小林秀雄の「母親」はほとんど瓜二つである。わが子を無条件に信頼し許容することにおいて、何ものにもまさる永遠の母性イメージ——男性の憧憬を、二人の小林は描いている。

しかし、先の中野が「一方的、専制的、母親の愛情を踏み台にする的、非人間的」とつめよったとき、思想を超えて男たちに共有されている母胎回帰願望——その母性神話のもつ抑圧構造におのずからふれて、中野はそこに亀裂を入れる役割を果たしていたといっていだろう。しかし、中野の発言目的はあくまで論敵殲滅にあったため、母親を問題化して相手の虚をつくことはしたが、この犠牲的母亲と主人公の関係はむしろ全面的に肯定したのである。その結果、中野は「私」とともに母性神話に回収されてしまったことになる。

それは小林多喜二の女性観を、笠原、伊藤の側からだけ引き出し、「女の代表ともいうべき母親の側」からは引きださない、という中野の非難の仕方にもよくあらわれているのであって、ここでは「女」を「母親」によって代表させ、「母親」の特権化することで「女」の他者は排除されるのである。

『党生活者』における「私」と笠原の関係は「私」と

母親の関係のじつは裏返しなのだ、と中野にむかって明瞭に反撃しえなかった戦後派男性の母親コンプレクスはあきらかである。

一九七〇年代以降のフェミニズム運動のなかで、「母性神話」の破壊はもつとも早く掲げられた「女」の主張の一つであった。男性に強いられた母性幻想に脅迫されて生きることで、「女」の自我がいかにゆがみ、その本来の成長をはばまれてきたか、それらを洗い出す仕事のなかから、「女」たちの母性嫌悪、子殺しのテーマが、たとえば高橋たか子、三枝和子その他によって鮮明に描かれたのは記憶に新しい。

*

『党生活者』論争などの平野謙の意見には全面的に賛成するのだが、しかし「いささか腑に落ちないのは、どうして、かれが、利用された修道女たちを責めないのか、ということである。(中略)それら利用されっぱなしのいくじのない修道女たちを、断罪すべきではないか」といったのは花田清輝である。

平野謙にとって思いもよらぬ方角からの一矢であったに相違ない。岡田嘉子は「可愛らし」い女優であり、笠

原は「不感症の人間蔑視」にさらされたハウスキーパーであつて、ともにかよわい「政治」の犠牲者である、という平野謙のステレオタイプを、花田清輝は根本的に問い直しているといつてよい。

花田清輝はマルクス主義運動内部の女性蔑視に対してはむろん、平野らその批判者たちに対しても対立した、今日のフェミニズム思想に通ずる問題のいち早い提供者であつた。

かつての同志ドン・キホーテは、ついに途中で脱落し、いまだは敵の戦列に参加しているが——しかし、サンチョ・パンザは、相い変らず十年一日のごとく人民解放のために戦いつづけており、いささかも飽きる模様もないのだ。どうしてこういう奇蹟がおこつたのであろうか。わたしは、その大きな原因の一つに、かれにたいするテレザ・パンザの協力をあげなければなるまい。

「サンチョ・パンザの旗」の一節である。花田によれば、「家庭」を桎梏と考へ惜しげもなく見捨てることで性急に解放を企てたドン・キホーテは没落したが、あとを受けたサンチョ・パンザは「家庭」をかれの理想実現の

ための「バリケードに転化」したのである。「奇蹟」の原因はそこにあるのであり、かれの妻テレザ・パンザは「女房であるとともに同志でもある、一人の女性」だとされている。

そこには、革命の禁欲主義的ラディカリズムによつて、現世を捨てた「修道僧」と、一方的に「利用されっぱなしのいくじのない修道女」の關係はなりたたない。マルクス主義文学運動とその批判者たちにも通底する権力構造を洞察し、反撃できる視座は「女房」であつて「同志」でもある新しい「女」のものである。花田におけるこうした新しい「女」のイメージは、いつどのようになら形成されたのか。戦時下の文章を小林秀雄と比較しながらみてみればわかる。

小林は「歴史と文学」(『改造』一九四一・三、四)のなかで述べている。「母親にとつて、歴史的事実とは、子供の死ではなく、寧ろ死んだ子供を意味する。(中略)母親の愛情が、何も彼もの元なのだ。死んだ子供を、今もなほ愛してゐるからこそ、子供が死んだといふ事実があるのだ。(中略)母親の愛情が、歴史的事実を現実化し具体化し客観化すると云はねばならぬ。」

あきらかに「Xへの手紙」の延長上にかかれた「歴史主義」批判といつてよい。出来事の一回想、非歴史性、

主観性を示す「具体」例は、子供に死なれた母であつて、夫に死なれた妻ではない。

同じ時期の花田清輝「女の論理——ダンテ——」（『文化組織』一九四一・四）は、この対極から発想されている。かれは「女の顔」を「抽象」的に描くことで「女のほんとうの顔」を描きたいという。「具体」的な女の顔が小林の「母親」であることは自明であらう。当時、「抽象的に女を描く」とは、献身的「母性」として天皇制ファシズムに回収されない「女」の可能性の追求であつたはずである。「女房」であつて「同志」であるような「女」は、じつはここに誕生する。

サンチヨの妻テレザは、湿潤な日本文学的風土の「詠嘆」調とことなる「砂漠的精神」の乾いた激しさを体現した存在であり、哀れにかよわい「女」とは無縁の「抽象的な女」である。遊牧生活のなかの共同の働き手であり、夫婦としてと同志としての愛情が「絶えずまじり合っている」。血縁によらない、男女という人間の基本単位によつて、同じ理想のもとに結合している。

しかし、現実には最初たしかに恋人であり同志であつた二人がいつの間にか気づいてみると「ただの亭主や女房に転化している」というような例は、じつに枚挙するにいとまがない」と花田はいう。これが宮本百合子『風知

草』（『文芸春秋』一九四六・九——）の重吉、ひろ子の関係を暗に諷したものであるのは明瞭だろう。戦後の日本共産党を先導した評論において颯爽たる百合子も、およそ古風な男女非対称をしか描けなかつたからである。

ところで、花田は同じ文章のなかで、『或る女』の女主人公に「女房的肉眼」などを発見する平野謙を揶揄していた。女主人公葉子は恋愛至上主義的な存在であつて「女房などという世帯じみたシロモノ」ではないといふのである。当時、平野謙は自然主義・私小説と、戦前マルクス主義文学相方の批判的克服の問題をめぐつて「女房的文学論」（『文芸』一九四七・四）なる刺激的標題の批評文をかいていたのである。

*

平野謙はしかし、『或る女』の主人公葉子が「女房的肉眼」をもっている、といったわけではない。「白樺派」の理想主義者有島武郎さえも「女房的視点」から独歩の苦しい恋愛を描くことで、文学的リアリティを確保しようとしたことに注目したのである。『欺かざるの記』一巻の著者が、その『思想史』的側面を捨象されて、このやうな赤づる剥けのすがたにまで単一化された

点に、自然主義文学の獲ち得たいはゆる人間真実の保証がある」というのであり、「女房的肉眼」とは平野謙にあっては自然主義的肉眼、ないしその人間観である。

平野謙によれば、近代日本文学独特のレアリスムに一貫するものは、社会から隔絶された「封鎖的な家族制度の枠内で、ひたすら日常性に偏執した自然主義・私小説の作家的眼光」であって、それは「女房のまなざしとシノニム」である。藤村の『家』の手法、構成くらいそれを代表するものはないが、この核大な長篇には、「社会経済的な眼くばり」がいささかもない。「女房的肉眼」を練磨しそれに固執してきた日本の私小説的文学精神は、やがて文壇に導入されたマルクス主義文学の「社会思想」「実証科学的な社会像」の前になすところを知らず、一方、マルクス主義文学は自己の思想を「一個の文芸思潮にまで晶化する困難な作業」をかえりみるとまがないまま、「世界観的には」自然主義的人間観など無視しながら「技法的には」平然と自然主義的レアリズムを採用してはばからなかった。この「奇妙な自己矛盾」の極限に『党生活者』もまたある。こうした事態のなかにプロレタリア文学の敗退も転向文学の氾濫もあったわけ、今日緊急な課題は「自然主義文学の徹底的な克服とマルクス主義文学の大胆な自己批判とを併せ行ふ」こ

とにある、というのが「女房的文学論」の提言であったのである。

むろん日本の『家』の周辺を内側から鋭くネガティブにあげた「点にわが自然主義文学の最大の功績を認めている平野謙である。したがって、自然主義文学の眼光と「女房のまなざし」がシノニムであるというなら、「女房」にも「最大の功績」は認められる道理であるのに、「女房」は、そのあらゆる陋劣卑小な特性が列挙されるばかりである。いわく「一個ゆるがぬリアリスト」「卑近低俗な唯物論者」「骨の髄からのエゴイスト」「生物学的人間観」「衝動的」「感覺的」「非論理的」など。近年になってこのあたりの平野謙の問題が論じられるようになった。平野謙は「文学における女房的視点の意義の発掘から、『女房的レアリズム』『女房的文学』自体の告発へ」という「屈折ないし矛盾」において「みずから男性的独善と馬脚」をあらわしたのであると数植子は述べている。

平野謙における矛盾のみなもとを尋ねるなら、それは自然主義の「女房」的視点が、自然主義男性作家の方法としてのみ意義を認められているところにあるだろう。本物の女房が「女房」的視点をもつ自然主義作家になろうなどとは、平野謙に思いもよらぬことなのである。

「婦人解放などと景気はいいが、ほんとに解放されちまつたら、いよいよ度しがたい有閑マダムになるしかあるまい」などとくちばしってしまうところにもそれはうかがえる。「可愛らしい」女優をイメージした平野謙は、反転して「窮鼠猫を囓む」「女房」のステレオタイプを仮構するにいたっているといつてよい。ここに「女房」であつて「同志」でもあるという、テレザとサンチヨのような理想的関係は見られないのである。かよわく哀れな聖女か、頑迷卑俗な悪女かといういわゆる「女」の二分割があるのみであつて、それこそ父権制社会のイデオロギーである「女性嫌悪(恐怖)」の二側面といつてよいのである。

女性を「外部」に排除することで緊密な信頼関係を維持する男性同志の支えあいが、父権制社会の特色であるとすれば、こうして戦後文学論争に登場する「女」たちによつて、戦後「民主主義」体制の父権の構造はおのずと暴きだされている。「或る女」の主人公は「女房」なんかではない、といった花田清輝は、マトを外してマトを射ていたといえるのかも知れない。恋愛と同志愛、女房と同志をイコールでつなぐ花田の「遊牧民的家族」の理念は、やはり当時であつて突出していたといえるであらう。

それは男女が「性的」的「階級」的主体として平等に結びつく「場」としての「家族」の理念であるが、また、男女が「相手の異質性と向きあい」ながらも、そのことによつて絶望するのではなく、「異質性に発する『対立』を樂しむ」関係なのだといわれてもいる。そこには「階級」のため、「政治」のために「手段」と化されたり、無限の献身を強いられたり、組織に隷従したりする「女」は存在しない。性差のイデオロギー支配を形成するとともに、それが作用する特権的「場」でもある「家族」が、ひらかれた対立関係としてある以上当然のことである。

「抑々、ディアレクティコス(16)のうまれたのは、ソクラテスの身辺に、稀代の悪妻クサンティッペがおり、両者の間に、絶えず猛烈な理論闘争が繰り返されていたためではなかったか!」とは、花田の思い描く男女関係のダイナミズムの原像のようだが、そうであるなら、平野謙「女房的文学論」における夫婦相剋とのあいだに、それほどの径庭はないのではないか。しかし、同じイメージから、つねに他者と対関係にある位相、対立する男女二項の間に優劣のない、互に相手を相対化しようとする積極的關係を抽出していく花田清輝と、亭主関白に居直ることで、女房との闘争を必然とし常態とするようなべ

シミステイックな平野謙との差異は明らかである。

とはいえその平野謙も「僕は信じてる、夫婦といふものが、必ずキンヒツ相和すなんてことになつたら世の中の進歩発展は止つちまう¹⁹⁾」といわざるをえなかつた。現実密着派平野謙も、理念派花田清輝も、やがて戦後の経済成長とともに蔓延する、いわゆる「近代家族」幻想からは自由な場所にたたずんでいた。その意味では、今日のフェミニズム批評の側からなお、問題をひき出しうる、対照的な二人の批評家ということになるのかも知れない。

- (1) 『悔いなき命を』(広済堂、一九七三・四)
『心に残る人びと』(早川書房、一九八三・七) 他
- (2) ウラジミール・ボブレニョフ 名越健郎(岡田嘉子)い
ま明かされた空白の10年の謎』(婦人公論)一九九四・
一一)
- (3) 『世界わが心の旅——ソビエト收容所大陸—岡田嘉子の失
われた十年』(テレビマンユニオン)現地取材、一九九
四・八・一四、NHK衛生第二放送放映
- (4) 『島崎藤村・戦後文学芸術評論』解説(富山房百科文
庫 一九七九・一〇)
- (5) 『日本を脱出して三十五年』(中央公論)一九七三・三)
- (6) 日本にタイプライターが出廻るのは大正期以降で、一
台ごとにタイプリスト学校出身者一名推薦する制度があつ

- た。大学出の月給が四〇円位の昭和初期、英文タイプピ
ト六三四、邦文四〇円の記録がある。村上信彦『大正期
の職業婦人』(ドメス出版、一九八三・一一)
- (7) 『小林多喜二問題』(季刊『芸術』Ⅲ 一九四七・四)
新潮社、一九六六・三)
 - (8) 『政治と文学』をめぐる論争』(物語戦後文学史)上
野潮社、一九六六・三)
 - (9) 『過去の作家・作品の新しくよびかけるもの』(『新日
本文学』一九四八・六) 引用は『中野重治全集』
 - (10) 森山重雄『小林多喜二——組織内小説について——』
『文学』一九六六・一)に「母親への感激と尊敬が反転
すればハウスキーパーに犠牲と献身をふりあてる」とあ
る。
 - (11) (13) 『同志愛の悲劇』(『婦人公論』一九五五・一二)
原題「失意の政治的性格」引用は『花田清輝全集』
 - (12) 初出未詳、推定一九四七・一二「二つの世界」所収、
引用右に同じ
 - (14) 『女房的文学論』私見』(『日本文学』一九九二・
一一)
 - (15) (18) 全集未収録「女房の限界」(『婦人公論』一九四
七・一〇)
 - (16) 菅本康之「花田清輝の家族論」(『文芸研究』一九九
〇・九)
 - (17) 『犬も喰わない話』(『新日本文学』一九四七・一一)